

小学校における演劇ワークショップの臨床心理学的意味について

The Meanings of Clinical Psychology of the Theatre Workshop at the Elementary School

角田 真奈 (Mana Tsunoda) 指導：菅野 純

【問題と目的】

演劇ワークショップ（以下、演劇WSとする）は、いわゆる舞台芸術作品としての演劇と区別し、「参加者全体が、演劇的な活動を体験する場の総称」と定義される（須崎，2000）。近年では、教育の現場において演劇関係者が演劇WSを行うという流れも増えつつある（小林，2005）。

しかしながら、その意味や効用について理論的な考察がなされてこなかったことが指摘されている（須崎，2000）。

よって本研究では、学校現場で演劇WSを行うことの、子どもたちにとっての意味について、探索的に検討していくことを目的とする。

【方法】

対象：世田谷パブリックシアターが実施している教育普及事業の1つである学校現場に出向いて行う演劇WSを対象とする。参加者は、Y小学校5年生（50名）であり、学芸会の練習という枠の中で行われた演劇WSである。学芸会の台本創作においての、児童の様子を主な対象とする。

手続き：200X年6月から8月に予備調査（4回）を行い、本調査は、200X年10月から11月までの期間に、Y小学校での学芸会の練習についての観察（16回）、演劇WSのファシリテーターへのインフォーマルインタビュー（3回）、参加児童への自由記述式アンケート調査（3回）を実施するフィールドワークを行った。

分析方法：予備調査から、演劇WSの4つの要素「受容の経験」「表現すること」「不合理の経験」「遊び」を設定した。そして、本調査のデータをこの4つの要素に沿って抜き出し、臨床心理学的枠組みで考察した。なお、記述はエスノグラフィーの手法による。

【結果と考察】

(1) 受容の経験

児童からは、“いい劇を作る”という動機が見られた。また、創作の過程において、ファシリテーターによる受容経験や自分の感情に気づく経験があり、自己と向き合うことがもたらされる。加えて“いい劇を作る”ために他者を受容していく経験もする。結果、良い劇を発表することができ、それまでの自分の頑張りを認めた自己受容につながる。そして、自己受容は適応を促すことにつながるといわれているため、演劇WSは、受容経験という側面から、適応

をもたらしという意味をもつと推察された。

(2) 表現をすること

この時期の友人関係は心理的距離があるとされる。児童は、心理的距離の影響を受けにくい安心した状況において表現をすることで、表現の楽しさを感じ、心を一つにすることを実感できるという意味が考えられた。また、表現することはアサーショントレーニングとしての応用可能性も考えられた。

(3) 不合理の経験

ファシリテーターによって児童は不合理な経験をするが、そこから欲求不満耐性をつけることができる可能性があること、また、ファシリテーターという異質な人との出会いが児童の日常のカテゴリも取り払い自己と向き合う機会が与えられること、という意味が窺われた。

(4) 遊び

演劇WSを学校で実施することは、社会性を育むとされる遊びの要素を含みながらも、完全なる遊びではなく“いい劇をつくる”、テーマ内容をよく考える、という目的的な活動であるということから、学校での授業としても活用しやすいことが示唆された。

【総合考察】

思春期といわれる時期の子どもに対して、学校現場で演劇WSを実施する臨床心理学的意味は、“いい劇を作る”という共通した動機のもと、面白さと安心感を基礎とした、他者との積極的なやりとりを行うことによる一体感の経験であると考察された。

【意義と今後の課題】

本研究の第1の意義は、第三者による記述の少なかった演劇WSについて、その詳細な実施内容とプロセスの記述という基礎的なデータを提供できた点である。2点目としては、本研究での演劇WSの意味の検討により、学校現場に広く実践される可能性を示すことができた点である。

今後の課題としては、今回そのプロセスがほとんど明らかにできなかった「表現」についての検討や、長期的効果の考察を行うことなどが挙げられる。